# 琉球大学学術リポジトリ

結婚移民のフィリピン人女性の増加とカトリック教 会

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): フィリピン人, カトリック教会, 宗教,
	移民, 先島諸島
	キーワード (En):
	作成者: 中西, 尋子, Nakanishi, Hiroko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010088

## 結婚移民のフィリピン人女性の増加とカトリック教会

中西尋子

- I. はじめに
- Ⅱ. 信者の高齢化
- Ⅲ. 共同体の一員として
- Ⅳ. フィリピン人女性信者の教会における働き-『南の光明』から
- V. おわりに

キーワード:フィリピン人,カトリック教会,宗教,移民,先島諸島

## I. はじめに

就労などの目的で来日し、日本に定住する外国人の増加によって日本のカトリック教会はこの20年で信者数が倍増し、信者の2人に1人は在日外国人と推計される<sup>1)</sup>。日本のカトリック教会16司教区のうち名古屋、横浜、さいたま、京都では外国人信者が日本人信者を上回る。群馬県のある教会では、20年前はクリスマスのミサに集まる信者は15人ほど、毎主日のミサも細々としたもので、ミサ後の茶話会ではいつも高齢化と健康が話題だった。ところが現在ではミサに100人ほどが集まって活気づき、話題も子育てや食事の話に変わった。結婚移民のフィリピン人女性の増加による変化だという(谷 2008: 24-29)。

先島諸島においても結婚移民のフィリピン人女性の増加が見られる。「在留外国人統計」 (2014年12月末現在)によれば、石垣市在住のフィリピン人は45人<sup>2)</sup>、宮古島市在住は81人であり、それぞれ在留外国人の15.7%、34.5%を占める。男女別統計ではないが、大部分が結婚移民の女性と考えられ、両市それぞれでもっとも規模が大きいエスニック集団を形成している。それならば、先島諸島においても結婚移民のフィリピン人女性たちの存在はカトリック教会を活気づかせたり、信者として一定の役割を担っていたりするのだろうか。

そこで本稿では石垣・宮古島でのカトリック教会信者への聞き取り調査およびカトリック那覇教区報『南の光明』を手がかりにしてこの問いに答えてみたい<sup>3)</sup>。『南の光明』(以下,『光明』) は B5 判 8 頁からなり,毎月発行される。教会に行くと置いてあり,誰でも自由に持ち帰って読むことができる(那覇教区のホームページからも PDF 版がダウンロード可能)。記事の内容は教区・小教区の行事の案内や報告,教区内人事,ニュース,お知らせ,着任あるいは帰国する司祭やシスターの挨拶,受洗者の氏名などであり,『光明』を見ると那覇教区や15 の小教区(石川,読谷,普天間,真栄原,安里,開南,小禄,石垣,名護,

具志川,泡瀬,コザ,首里,与那原,宮古平良)におけるできごとがおおよそ把握できる。各教会の司祭,シスター,信者などによる記事もある。バックナンバーの記事ではフィリピン人女性信者たちへの言及がしばしば見られ,教会内において彼女たちがどのような役割を担っているのか,日本人信者からどのように受け止められているのかなどを知ることができる。ここでは入手できた2006年4月号(第557号)から2015年8月号(第681号)までを用いる。

在日外国人と彼(女)らが信仰する宗教についての研究は、かつて在日外国人の多数を占めた在日韓国・朝鮮人の宗教(儒教、巫俗、在日大韓基督教会および韓国系キリスト教会)に関するものがほとんどだった。在日外国人の増加、多様化とともに「ニューカマーと宗教」という視点からの研究がなされるようになり、カトリック教会の外国人信者についてだけでなく、在日ビルマ人や日系ブラジル人のキリスト教、フィリピンや韓国系のプロテスタント教会、タイやスリランカの上座仏教、台湾やベトナムの仏教、在日ムスリムなどについての研究もみられるようになった(Zarace Robert .2008、三木・櫻井 2012、三木 2015)。しかし、先行研究は日本の本土のものであり、沖縄、とくに先島諸島におけるニューカマーの宗教についての研究は、これまでのところ見られない。その点で、本稿はニューカマーと宗教の関わりが本土と先島諸島で差異があるのかどうかを検討する一事例になると思われる。

## Ⅱ.信者の高齢化

日本社会における少子高齢化の状況はカトリック教会の信者にもあてはまり、それは一部の教会だけの話ではない。石垣教会でも同様である<sup>4)</sup>。石垣教会では現在、主日のミサ後にモーニングサービス(茶話会)が実施されているが、これはいったん途絶え、また復活したという経緯がある。途絶えた理由はモーニングサービスを担当していた女性たちの高齢化である。日本人女性信者 I-13 は次のように語っていた。

「モーニングサービス自身, うちの教会ではおばちゃんたちが頑張ってやっていたのね。だから,このおばちゃんたちができなくなったらもうナシなんですよ。もう高齢化していったら手を引くわけでしょう。そしたら,ないわけよ」。モーニングサービスがないと信者は「ミサが終わるとさっさと帰ってしまう」状況になり,信者同士の親睦が図れなくなることに危機感を抱いた女性たちがグループを作って当番制で行うようになった。

それでも、教会内で率先して動くことが望まれるような若い世代の日本人信者は少ない。 そのため I-13 は石垣教会のフィリピン人女性信者に次のような思いをもっている。

「今からやっぱり、あの人たちの時代、と言ったらちょっと語弊があるけれど、あの人たちにやっぱり頑張ってもらわないといけない」、「お客さんではなくて、もう主人公とし

てリーダーとして、やっぱり(フィリピン人女性信者を)育てないといけない」。

石垣島の調査では9名のフィリピン人女性に聞き取り調査を行った。年齢構成は30代1名,40代7名,50代1名であり,40代が多い(宮古島で聞き取り調査をした11名も加えて20名の年齢構成をみると30代1名,40代12名,50代6名,60代1名である)。日本人信者が高齢化する中で,I-13は比較的若いフィリピン人女性信者にこれからの教会を実質的に担っていく役割を期待している。

## Ⅲ. 共同体の一員として

今でこそフィリピン人女性たちに「実働部隊」の役割が期待され、そして実際に彼女らは教会で一定の役割を果たしているが、最初からそうだったわけではない。日本語の理解が十分でなかったり、仕事の関係で主日のミサにあまり出てこられなかったりして、教会の中でまだ「お客さん」的存在だった頃もあった。月に1回は水曜日の夜に英語のミサを実施したり、フィリピン人シスターが家庭訪問をして名簿を作成し、組織化を図るといった努力の積み重ねがあり、フィリピン人女性たちにも共同体の一員としての自覚をもってもらうようにした。

石垣教会にはフィリピン人女性信者の集まりとして「カイビガン」(タガログ語で「友達、仲間」という意味)がある。カイビガンは 2003 年にフィリピン人シスターの働きによって石垣教会のフィリピン人女性信者 20 名ほどから始まった(「ゆいまーるのカイビガン 祈りでつながろう 石垣教会(たて軸よこ軸)」2014年2月号、第663号)50。教会組織の中では「女性の会」が4組(1組、2組、3組、カイビガン)に分かれて「典礼・清掃当番」を担当するが、カイビガンもそのうちの一つに組み入れられ、主日のミサでは日本人信者と同じように交代で信者の前で聖書を読んだり、代表で祈りを捧げたりし、モーニングサービスも担当している。フィリピン人女性 I-1 は教会の評議員(信徒の代表者)でもある。I-13 はカイビガンがモーニングサービスを担当するようになってからフィリピン人女性 F-1 は教会の評議員(信徒の代表者)でもある。I-13 はカイビガンがモーニングサービスを担当するようになってからフィリピン人女性たちに次のような変化を感じている。

「自分たちも認められたっていうのかな,正式なメンバーであるというふうな意識が芽生えてきたような,ものすごく信仰の垣根がなくなった。顔見てもあれでしょう,沖縄人と全然変わらないでしょう」(I-13)。

『光明』には次のような記事もあった。

「当小教区は6月17日に創立55周年を迎え、その記念として教会横に『憩いの庭』がマリエル神父さまとフィリピンの信徒さんを中心に造られました。そこには異国情緒豊かな『イエスの聖心』の御像がかざられ、回りには手造りの椅子、花壇には信徒の方々が庭から持ってこられた花や木なども植えられています」。(「3つのニュース 石垣教会」

## 2008年9月号, 第598号)

「信徒の中での,カイビガン (フィリピンのお母さん方の集まり) の大勢の皆さんのおかげもあり,石垣教会の存続,継続に大いに寄与していただいております」。(「感謝石垣教会(たて軸よこ軸)」2015年5月号,第678号)

I-13 の語りや『光明』の記事から、日本人信者が相対的に高齢化する中で石垣教会ではフィリピン人女性が一定の役割を果たし、日本人信者もその働きを認めていることがわかる。では、石垣教会だけでなく他の那覇教区の教会においてはどうだろうか。フィリピン人女性たちは教会でどのような役割を果たし、それは教会を活気づかせるような働きとなっているのだろうか。『光明』から探ってみたい。

## Ⅳ. フィリピン人女性信者の教会における働きー『南の光明』から

前節までは石垣教会を事例にしたが、以下ではフィリピン人女性に言及がみられる記事であれば石垣、宮古島の教会に限定せずに取り上げる。石垣と宮古島に限定すると記事が限られ、フィリピン人女性の増加による変化や彼女たちが果たす役割も限定的にしかとらえられないからである。

フィリピン人女性信者に言及がある記事を拾い出すとおよそ次のように分類できる。① 教会行事における余興での活躍ー料理や踊り、②日本の教会にはなかった新たな行事の始まりーサントニーニョ・フェスタ、③新たな教会の設立ー読谷教会。以下ではこれらの記事を拾い上げて内容を見ていく。

## 1. 教会行事における余興での活躍-料理や踊り

フィリピン人女性に言及した記事の中では、これがもっとも頻繁に見られる。教会では復活節、創立記念日、コンサート、バザーなどさまざまな行事が行われる。それらの行事や記念式典のミサの後には祝賀会があり、信者による余興や持ち寄った料理での食事のひとときがもたれる。そうした祝賀会にフィリピン料理はいつも並ぶかのように、またフィリピン人女性たちによる踊りは定番の出し物の一つかと思われるほど記事に登場する。ベトナムやインドネシア出身の司祭やシスターもおり、ベトナムやインドネシアの料理、踊り、歌などへの言及もあるが、フィリピンへの言及がもっとも目立つ。料理への言及が見られる記事には次のようなものがある。

「楽しい会食となりました。あさがお会のイナムルチ,フィリピンの方々の手作り料理,インドネシアの方々の数々の差し入れなど,国際色豊かな料理をいただきながら,余興を楽しみました」。(「宮古平良教会創立50周年を祝う 宮古平良教会」2008年12月号,

2016/05/11 1:17:41

## 結婚移民のフィリピン人女性の増加とカトリック教会(中西尋子)

## 第601号)

「それは9日間の祈りの夕べでしたが、フィリピンの信者さんたちが大勢参加してくださり、そして毎晩おいしい料理も持ち寄ってきてくださいました」。(「読谷教会落成によせて」2006年11月1号、第576号)

「読谷教会のフィリピン人信徒たちのサービスで御馳走がふるまわれた」。(「チャリティーコンサート 読谷教会(教区・教会 NEWS)」2009 年 11 月号,第 612 号)

「コンサート終了後は全員にフィリピン料理が振る舞われ、和やかな会話もはずむ、楽しいひとときを過ごしました」。(「バレンタイン・コンサート 小禄教会(教区・教会 NEWS)」2010年3月号、第616号)

「今年は初めて参加したフィリピン料理を含め、15 のコーナーを設置した。めずらしいフィリピン料理やベトナム料理の春巻き、南米料理のエンバナーダなど人気があり早い時間での完売となった」。(「バザーにぎわう-2 つのたより 与那原教会(教区・教会 NEWS)」2010年12月号、第625号)

「いよいよお待ちかねのパーティーです。テーブルいっぱいに所狭しと並べられたー品料理持ち寄りのご馳走はフィリピン料理とウチナ料理の饗宴で、一流ホテルにも引けをとらないほどです。余興も子どもの合唱、ファミリー会(フィリピン出身の人々)の歌やカラフルな衣装をまとった民族舞踊等があり、とても素晴らしかった」。(「聖家族パーティー コザ教会」2015年2月号、第675号)

教会によっては信者の多くがフィリピン人女性で占められているところもあるため、教会での食事となるとおのずとフィリピン料理になるところもあるが、会食の席にフィリピン料理が並ぶことはもう当たり前になっている。

フィリピン人女性による踊りについて言及がある記事には次のようなものがある。料理 の提供と同じく、教会行事の余興にはフィリピン人女性たちの踊りが出し物の一つとして すっかり定着しているようである。

「(司祭, 助祭合同会議および石垣永将巡礼祭の) 余興のプログラムの一番はカィビーガンの若いお母さん方のダンス。お色気たっぷりに踊る若いママさん達にアンコールが飛び交い,ママさん方もアンコールの拍手に乗せられ再び登場してダンスを披露している所に神父様方も飛び入り参加され,和やかな雰囲気に包まれていました」。(「石垣教会流のおもてなし一石垣教会だより」2007年12月号,第589号)

「ミサの後は、教区青年会が中心となって祝いの宴が催された。琉球舞踊の幕開けに始まり、フィリピンやベトナムの民族舞踊や歌もあって会場を盛り上げた」。(「喜びと感謝 新司祭着任、司祭候補認定式、金・銀杯、金婚式」2009年3月号、第604号)

これらは司祭・助祭の会議や司祭の着任式・候補認定式終了後に行われる愛餐会・祝賀会的な場であり、堅苦しさもあまりない。余興の出し物の一つとしてフィリピン人女性たちによる踊りが披露される。非常に重要な来客の歓迎行事でもそれは変わらない。次のような記事があった。

「ローマ教皇庁駐日バチカン大使アルベルト・ボッターリ・デ・カステッロ大司教が押川司教様とモンセニョール・カレンガ神父様とともに来島された。…その夜は、大司教様の祝福のあと、教会挙げての歓迎式がホールで行われ、八重山の歌と踊り、子どもたちの元気な歌、カイビガン(フィリピン出身者の会)のダンスがあり、…。(「教皇大使カステッロ大司教様の石垣訪問 石垣教会」2007年3月号、第580号)

ローマ教皇庁駐日バチカン大使と那覇司教の石垣教会訪問と歓迎会の様子を伝える記事である。教会で行われる歓迎会とはいえ、来客はローマ教皇庁駐日バチカン大使と案内役の那覇司教である。先の司祭・助祭の会議や司祭の着任式・候補認定式のときよりもはるかに気を遣わねばならない相手であろう。一般に日本人が外国人の来客をもてなすとき、日本らしさ、その土地らしさを意識しがちであり、この場合だと沖縄、石垣島らしさになりそうなものである。そのような場合であっても八重山の踊りとともにフィリピン人女性たちの踊りも披露される。この記事からはフィリピン人女性たちはまったく日本人と変わりない共同体の一員になっていることがわかる。

このような行事の余興には、フィリピン人女性たちの踊りが定番の出し物のようになっている。結婚前にエンターテイナーとして働いた経験がある女性もおり、若い頃にダンスの訓練を受けた彼女たちにとって人前で踊ることは「昔とった杵柄」かもしれないし、エンターテイナーの経験がない女性たちにとっても仲間と踊ることは楽しいことなのだろう。宮古島ではフィリピン人女性たちが「マブハイダンスグループ」を結成しており、地区の婦人連合会のフェスティバルなどでも踊りを披露している。このような点から、教会行事での余興となるとフィリピン人女性たちの出番となるのだと思われる。

記事には執筆者の氏名が記載されており、これら教会行事に関する記事は書き手が日本 人信者だということがわかる。記事内容に人種や民族の偏りがないように執筆者が気を 遣ってあえてフィリピン人信者に言及しているというような様子は感じられず、日本人信 者はフィリピン人信者をごく自然に受け入れているという印象を受ける。

「お色気たっぷりに踊る若いママさん達にアンコールが飛び交い…和やかな雰囲気に包まれていました」からは両者には日本人、フィリピン人という違いを超えてともに一緒になって楽しんでいる様子が伝わってくる。

## 2. 日本のカトリック教会にはない新たな行事の始まりーサントニーニョ・フェスタ

「サントニーニョ・フェスタ」はフィリピンのカトリック教会で行われている幼きイエズス崇敬の祭りである。在日フィリピン人の増加とともに日本のカトリック教会でもフィリピン人信者を中心に行われるようになってきている(寺田 2013)。この祭りが2003年から具志川教会でも行われるようになった。それを伝える記事が2007年,2010年,2012年,2015年に見られる。日本のカトリック教会にはもともとなかった行事だが、記事から日本人信者の受け止め方がうかがわれる。

「当教会では第7回目の「サントニーニョ祭」(幼きイエスを称える祭)を開催しました。 …今では私たちの信仰の大きな財産になっています」。(「ビバ! サントニーニョ祭 具志川教会(教区・教会 NEWS)」2010年3月号,第616号)

「同じ信仰を持つ私たちが唯一幼きイエスを思い起こし、幼き頃の素直な心を取り戻すことができるお祭りだと私は思います」(「サントニーニョ フェスティバル 具志川教会(教区・教会 NEWS)」。2012年3月号、第640号)

「日本では馴染みがないようだが当教会では毎年恒例の行事となった。フィリピンの方たちが大切に思っている事を自分たちも大切に思い、皆さんの喜びを共にしたいという気持ちがこのフェスティバルを通して自然に育まれたのかもしれない」。(「サントニーニョ・フェスティバル 具志川教会(教区・教会 NEWS)」(2015 年 3 月号、第 676 号)

具志川教会ではサントニーニョ・フェスタは、すっかり恒例行事となっている。「今では私たちの信仰の大きな財産になっています」、「幼き頃の素直な心を取り戻すことができるお祭り」、「フィリピンの方たちが大切に思っている事を自分たちも大切に思い、皆さんの喜びを共にしたいという気持ち」という記述からは日本人信者もこの祭りを積極的に受け入れ、一緒に楽しんでいることがわかる。

祭りにはパレードがあり、それが終わると食事と余興がある。先述と同様にフィリピン料理や踊りへの言及が見られる。司祭がバンブーダンスに挑戦し、場を大いに盛り上げることもあったようである。

「フィリピン料理, バーベキュー, ケーキなどのバザー。フィリピンの踊り, エイサー, …などのアトラクションで一日を楽しく過ごしました」。(「サントニーニョ・フェスタ 具志川教会」2007年3月号, 第580号)

「フィリピンのバンブーダンスや伝統的な踊りや歌などなど…。また食事も、…焼き鳥にフィリピンのデザートなど盛りだくさんの品が並びました。…私個人は、司祭様がバンブーダンスに挑戦した時がこの日のハイライトではなかったかと思っています。」(「ビバ! サントニーニョ祭 具志川教会(教区・教会 NEWS) | 2010 年 3 月号、第 616 号)

2016/05/11 1:17:41

名称未設定-1 75

表 1 日本のカトリック教会の日本籍・外国籍別の司教・司祭数

教区	日本籍		外国籍		合計
	人数	%	人数	%	人数
札幌	41	70.7	17	29.3	58
仙台	20	55.6	16	44.4	36
新潟	22	59.5	15	40.5	37
さいたま	33	55	27	45	60
東京	215	63.2	125	36.8	340
横浜	62	64.6	34	35.4	96
名古屋	65	50.4	64	49.6	129
京都	30	62.5	18	37.5	48
大阪	85	52.1	78	47.9	163
広島	37	64.9	20	35.1	57
高松	13	29.5	31	70.5	44
福岡	52	69.3	23	30.7	75
長崎	132	91	13	9	145
大分	31	60.8	20	39.2	51
鹿児島	31	72.1	12	27.9	43
那覇	6	25	18	75	24
合計	875	62.2	531	37.8	1,406

出典:カトリック中央協議会 2015『カトリック教会現勢 2014』より作成。

寺田によると、いくつかの教会を除き、日本人とフィリピン人は別々の共同体として存在し、両者が日常的に接触、交流することはほとんどないという(寺田 2013:246)。しかし『光明』の記事を見る限り、サントニーニョの祭りや先の「①教会行事における余興での活躍―料理や踊り」で見たように那覇教区の教会ではそのような両者の分離は感じられない。これは那覇教区における外国籍司祭の多さや島嶼性が関係すると推察される。表1にあるように那覇教区では司祭24名のうち外国籍が18名、日本籍が6名である。司祭の4分の3が外国籍であり、他の教区よりも外国籍司祭の割合が高い。また地理的な境界線がはっきりとした一定の地域内においては、日本人、外国人はつねにお互いが顔を合わせざるを得ない。このような点が日本人、フィリピン人(そして他の外国人信者)という壁を低くしているのではないだろうか。

#### 3. 新たな教会の設立―読谷教会

読谷ではフィリピン人の増加によってフィリピン宣教会とフィリピン人信者が中心になって2006年11月,新たに教会が設立された。これまで読谷にはカトリック教会がなく、信者は泡瀬教会に通っていた。土地だけは「住宅地の真ん中に」60年も前からカトリック教会が所有する「ガジュマルの木や雑草が生い茂り、ハブも出るという原野」があったが、読谷に生まれ育ち何十年にもなる信者さえ、そのような土地があることを知らなかっ

#### 結婚移民のフィリピン人女性の増加とカトリック教会(中西尋子)

た。そこに教会建設の話が持ち上がったのだから日本人信者にとっては青天の霹靂だったようである。ジャングルだった土地が整地され、復活祭のミサはそこにテントを張って野外で行われた。それを伝える記事に次のような記述があった。いかに驚きだったかがよくわかる。

「天から降ってきたお恵みであり、全く神様の御摂理です。ポカンと口を開けて空を 見上げていたら、突然マナが降ってきた、という次第です。まるで宝クジに当たった様 な気分で、いまだに信じられないような気持ちです」。(「読谷教会の復活祭」2006 年 5 月号、第 570 号)

復活祭の野外ミサの様子は次のように記述されている。

「泡瀬教会や具志川教会の皆様,真栄原教会からの大勢のフィリピン共同体の信者さんたち,そして読谷在住の信者さんたちが集いました。…集まった総勢100人ぐらいの信者たちは当日の青空のように、読谷教会の前途に胸をふくらませました。野外ミサにあずかり、フィリピン共同体の方々が持ち寄って下さったおいしい手料理を味わいながら、至福の時を過ごしました」。(「読谷教会の復活祭」2006年5月号、第570号)

建設前にはバザーやチャリティーコンサートなどが行われ、教会建設のための資金が集められた。フィリピン人信者が教会設立のために協力し合う姿は、日本人信者に少なからぬ感銘を与えたようである。

「去る5月14日(日)《母の日》にロメル神父(泡瀬教会主任司祭)とフィリピン共同体の協力により那覇教区主催のチャリティーコンサートが行われた。…フィリピン出身信徒の皆さんがこれだけ一致団結して協力している姿には感激しました。他人事ではない、私たち那覇教区の事なのだ…」(「チャリティーコンサートにぎわう 読谷教会建設準備」2006年6月号、第571号)

2006年10月8日にはプレハブの教会で献堂式が行われた。献堂式の前の9月30日からは「ノベナの祈り」(カトリック教会において何か特別なことのために9日間連続して行う祈り)のミサが毎夕捧げられ、フィリピン人信者も大勢参加し、「毎晩おいしい料理を持ち寄って」くれた。これについても日本人女性信者は「フィリピンの方たちの信仰と行動力と惜しみない働きは本当に賞賛に値するものです」(「読谷教会落成に寄せて」2006年11月号、第576号)と高く評価する。

日本人信者にこれだけの感銘を与えるほどフィリピン人信者が教会設立に努力を惜しまないのは、それだけ彼女たちにとって教会が重要だからである。もともとカトリックの信

者であり、日曜日のミサに行けばフィリピン人同士が会える。情報交換、家族には言えない愚痴や悩みの相談など、結婚移民の女性同士の話はつきないものと思われる。集住していないために普段接するのは日本人ばかりという中にあって、教会は唯一フィリピン人同士が顔をあわせることができる場である。フィリピンで暮らしていたとき以上に教会は重要になり、だからこそ教会設立に一所懸命になる。

人が人を呼ぶのか、読谷教会は設立1年にしてフィリピン人信者の増加が著しい。

「当教会では、フィリピンの信者さんがどんどん増えて、日曜日のミサには 70 人から 90 人の人達が集います」。(「創立 1 周年を祝う 初聖体・堅信礼も 読谷教会」 2007 年 11 月、第 588 号)

その後、新会堂建設の話が進められた。これについては次のような記事がある。

「読谷教会は、日本人の司牧とともに、英語を母国語とする信徒の司牧にも重点が置かれている。これまで大勢のフィリピン出身の信徒たちが教会の活動を支えてきた。ロメル神父の指導のもと、日本人信徒とフィリピン出身信徒はひとつの共同体として新聖堂建築に向けて動き出した」。(「3小教区が教会堂建設を計画 読谷教会(教区・教会NEWS)」2010年10月号、第623号)

2011 年 9 月には新会堂の献堂式が行われた。2013 年の「カトリック新聞オンライン on Twitter」によれば、日本のカトリック教会は高齢化と司祭減少で教会の数は減少傾向にあり、この 10 年間に新たに設立された教会は読谷教会と茨城県の常総教会だけではないかとある。本稿の関心は結婚移民のフィリピン人女性の増加が先島諸島のカトリック教会を活気づかせるなどの影響を与えているのかという点にあるが、読谷教会の設立はその影響を示す一つの表れといえる。

また那覇教区では2012年10月に初めてフィリピン人信徒大会が開催された。第1回は安里教会で開催され、沖縄各地から300人あまりのフィリピン人信者が集まり、中には南大東島からの参加者もいた(「那覇教区フィリピン信徒大会開く (教区・教会 NEWS)」2012年12月号、第649号)。翌年の2回目は小禄教会で開催され、200名あまりの参加者があった(「第2回在沖フィリピン人信者大会(教区・教会 NEWS)」2013年11月号、第660号)。フィリピン人だけの信徒大会が開催されることも那覇教区におけるフィリピン人信者の存在が大きいことを示している。宮古島ではすでに2011年にフィリピン人信者の司牧を手助けするために那覇司教の要請に応え、OND(オブレート・ノートルダム修道女会)から3人の修道女が派遣されている。(「オブレートのノートルダム修道女会)を道会だより」2011年11月号、第636号)

## Ⅳ. おわりに

本稿の目的は、日本のカトリック教会で結婚移民などの移住者の存在が教会を活気づかせたり、一定の役割を担ったりしているのかについて、先島諸島をはじめ、那覇教区を事例に確認しようとすることにあった。『南の光明』の記事からは結婚移民のフィリピン人女性たちが教会内で一定の役割を担い、貢献していることが確認できた。

最後にもう一つ『光明』の記事を引用したい。石垣教会のフィリピン人女性がカイビガンを紹介したものである。教会活動のさまざまなところで彼女たちは活躍していることがわかる。

「奉仕活動も生き生きと、毎日曜日のミサ後のモーニングサービスも、聖歌隊も、バザーへの協力も、行事の時の余興にも、信徒評議員への参加も、フィリピン信徒大会への参加も、今は海星小学校創立50周年記念事業の合唱団の団員としても、30人の仲間がそれぞれの部署で大きなウェイトを占めています」。(「ゆいまーるのカイビガン 祈りでつながろう 石垣教会(たて軸よこ軸)」2014年2月号、第663号)

少子高齢化による教勢の衰退はカトリック教会だけの話ではなく、日本の伝統的な仏教 教団や神社はもちろんのこと、プロテスタント教会、新宗教も同様である。その中でカト リック教会だけは先行きがまだ明るい。移民の増加により、そして「属人教会」(特定の 言語ごとの独立した教会)を作らないという方針(谷 2008:33-35)のもとに教勢の下降傾 向はある程度抑えられそうである。まさにカトリックの「普遍性」の強みといえるのでは ないだろうか。

## 注

- 1) おもにブラジル, ペルー, フィリピンからの移民である (Ogsimer Restitute, Gatpatan Agnes V. 2008)。
- 2) 石垣市のフィリピン人人口を1976年から現在までを見ると1988年までは1桁,1989年はデータがなく,1990年には15人に増加している。1995年まで右肩上がりに増加し51人になるが、その後は増減を繰り返している。
- 3) 現地での聞き取り調査は 2013 年 8 月 30 日  $\sim$  9 月 2 日に石垣、2014 年 8 月 28 日  $\sim$  31 日に宮古島で実施した。
- 4) 1953 年設立。2013 年 11 月には創立 60 周年を迎え、記念式典が行われた。
- 5) カイビガンは月に1回,フィリピン人女性たちが持ち回りでマリア像を自宅に安置し, 祈りの会「ロザリオ」を行っている。年1回開催される信徒総会の「活動報告」の資料

には「○○さん宅でロザリオの祈り」として記載されており、フィリピン人女性信者が 中心の集まりとはいえ、信者の活動の一つとして公的に位置づけられていることがうか がわれる。

6)「日本のカトリックは高齢化,司祭減少で,教会数は減少傾向。この10年で新設は,沖縄・ 読谷教会とこの茨城・常総教会二つではないか(2013年3月1日)」という記述がある。 「カトリック新聞オンライン on Twitter」

(https://twitter.com/cathoshin/status/307669706989527040, 2015.10.15 閲覧)

## 文献

谷 大二 2008『移住者と共に生きる教会』女子パウロ会。

Ogsimer Restitute, Gatpatan Agnes V., 2008, "Filipino Women in Cross-cultural Marriage: Their Emerging Roles in the Catholic Church in Japan" 『上智アジア学』(〈特集〉日本のカトリック教会と移住民)26: 41-56.

Zarate Robert., 2008, "The Filipinos in the Catholic Church in Japan" 『上智アジア学』(〈特集〉日本のカトリック教会と移住民) 26:25-39.

- 寺田勇文 2013「日本のフィリピン人カトリック共同体―日本におけるフィリピン人キリスト教会とコミュニティ」吉原和男ほか編『人の移動事典―日本からアジアへ・アジアから日本へ』丸善出版,246。
- 三木 英・櫻井義秀編著 2012『日本に生きる移民たちの宗教生活―ニューカマーのもたらす宗教多元化』ミネルヴァ書房。
- 三木 英 2015『宗教的ニューカマーの研究―日本における外国籍住民の宗教への社会学的 アプローチ―』(平成 24 年度~平成 26 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C),研究課 題番号 24530686),大阪国際大学。

(なかにし ひろこ・関西大学ほか非常勤講師・宗教社会学)